

この人に聞く⑦ 平田大六さん

新潟の風土を活かしたお酒と
若者に夢を仕掛ける



聞き手
編集部

1933年12月30日 新潟県関川村に生まれる

1956年3月 広島大学工学部卒業

1957年3月 同大学醸酵工学専攻修了

1957～2001年 大洋酒造入社

1993～1999年 同社長

1996～2000年 日本吟醸酒協会理事

1996～2001年 新潟清酒学校校長

2001年12月24日 関川村長 至現在

関川村村長の平田大六（ひらた だいろく）さんは大洋酒造の社長をされていたころから、村づくりは若者づくりの信念から、「若者に夢をしかける」私塾を立ち上げて若者を育ててきました。新潟の淡麗辛口の酒づくりから若者づくりまでお話を伺いました。

編集部

兄が戦死して

私は六人兄弟の六番目として1933（昭和8）年に関川村に生まれました。一番上の兄とは10歳違いです。

当時、私の家は造り酒屋をやっていました。兄は実家の家業を継ぐために旧制新潟中学（現新潟高校）から広島高等工業専門学校（現広島大学）の醸造科に入學しました。

その兄が中学1年生のときに父が亡くなっています。そのとき私は2歳でした。

兄は学校を出てから家にもどらずに下宿しながら新潟県の醸造試験場の技師になりました。当時県下には150軒程度の酒蔵がありました。今は95軒くらいです。兄はこれらの酒蔵を巡回して指導する役目でした。また杜氏たちも試験場に泊り込んで酒造りの技術を学んでいました。そこで出来た酒は「あがた県の光」として新潟県が販売していたのです。

戦争が次第に激しくなつた1943（昭和18）年に兄も出征しました。半年後に朝鮮半島に渡る途中で輸送船が撃沈されて兄は亡くなりました。

私は当時、小学校の5年生でした。その後母は私に家業の酒蔵を継ぐように言いました。母親はどこで調べたのか、兄のいった学校が戦後の学制改革で広島大学になり、その工学部に醸酵工学科があることを調べていました。

そんなことで私も兄と同じように新潟高校から広島大学に入學しました。兄が使っていた教科書やノートをそのまま使うことが出来ました。

私は大学院の前身の専攻科に1年いて、1957（昭和32）年の春に関川村に帰ってきて大洋酒造に入社しました。

当時は県内の酒蔵の数は最盛期の三分の一程度に減少していました。岩船郡内でも14軒あった酒蔵が合併して大洋酒造一社体制になっており、全国のモデルともいわれていました。

一社といっても山北、村上（2酒蔵）、神林、そして私の関川の5つの酒蔵で酒造りをしていました。その後、いまの村上の本社のみで酒造りをする体制が確立して現在に至っています。以来40年以上になります。当時は「大洋盛」として、工場の周りで消費されていました。5つの酒蔵の間で酒質に差がありました。問屋からは「こないだのもの」と味が違つ」とたびたび言われました。

したがって私が入社してからの仕事は、5工場で出来た酒質を一つにまとめるためにブレンドすることでした。

これには大変苦労しました。

その頃の酒造りは戦前以来の杜氏まかせの酒づくりが多く、杜氏の請負制もありました。杜氏と蔵元とは毎年の契約で酒づくりをする方式です。杜氏は自分の弟子を連れて、春まで蔵元に泊り込みで酒づくりをしていました。杜氏が変われば酒の味も変わるといわれたものです。

蔵元のほとんどは旦那衆で、杜氏にどんな酒をつくらばいいか聞かれると、酒づくりは素人ですから、「いい酒をつくれ」程度の表現しかできません。

新潟の風土にあった酒をもとめて

酒づくりは技と原料と人、環境などの要素で決まります。原料は米と水です。人というのは経営者の姿勢、ポリシーです。

戦後の日本酒は灘でも伏見でも、新潟県でも濃い酒、濃醇で甘い酒が好まれました。食料事情が悪いために、酒が食生活の中心になり、「主」の役割をつとめたからです。また酒不足のせいもあって、少量でも腹をみたく甘口の酒が好まれました。ところが世の中の食料事情が変わり飽食の時代に入ると、酒は料理を引き立

てる「従」の役割へと変わりました。

いわゆる淡麗辛口といわれる、さっぱりとした味が好まれるようになりました。世の中が落ち着くと酒もふんだんにありますから、飲み飽きしない辛口の酒が歓迎されたのです。

最近ではウィスキーは水割りが好まれ、焼酎などはいろんなもので割って飲みますから、酒の味わい方が変わってきています。それに濃い酒はどうしても味が複雑になりやすい傾向にあります。

昔から「太平の世の中には辛口、乱世には甘口の酒」が流行るといわれてきました。

70年代後半に入り、全国的に地酒ブームがやってきましたが、新潟でも淡麗辛口の酒づくりが基本になりました。その点では幸い新潟は淡麗辛口の酒づくりにふさわしいいくつかの条件が備わっていました。

日本酒のタイプは、原料としての米と水で決まります。新潟の酒米は発酵中に溶けにくい性質があるため、酒質は淡麗になりやすい。また新潟の水は軟水であるために酵母の働きが抑えられ、そのため日数がかかり、酒質が穏やかで淡麗に仕上がります。

新潟の清酒の精米の歩合は常に全国のそれより下回

っています。うんと研いでいるということです。これは新潟の蔵元たちの酒づくりに対する姿勢の現われだと思えます。日本酒の醗酵温度は10度から15度ぐらいであって、古来酒造時期は冬中心でした。この考え方は基本的に今も変わりません。新潟の冬は酒づくりに相応しい風土です。しかも降雪は空中の不純物を清浄にします。また積雪は断熱効果もあります。新潟の酒のタイプは新潟の環境風土によったものです。

新潟の淡麗辛口の酒を守り育てるためには杜氏任せにはできません。

酒づくりで技術者と杜氏の関係は、技術者が酒づくりの設計図を引き、杜氏がその設計図にそって酒をつくる技能者という関係だと思えます。

県内では新潟清酒の技術を研究するために1973（昭和48）年に技術者が50人ほど集まり新潟清酒研究会をつくりました。この研究会は酒蔵の若い技術者で組織されたもので、やがて新潟清酒の技術を理論的にリードしていくようになりました。また同1984（昭和59）年には新潟清酒学校をつくりました。年間100時間余、定員20名で3年課程です。講師は新潟県醸造試験場と新潟清酒研究会の技術者などです。

卒業生は400名を越え県内の酒蔵の半分ぐらいに勤めています。私も96（平成8）年から5年ほど校長をおおせつかりました。

若者を育てる私塾を立ち上げて

新潟の米や水の特性にあつた酒づくりにとり組んでいた87年、当時の新野容介関川村村長から「せきかわふるさと塾」を立ち上げるから協力してくれないかという話がありました。

目的は村づくりは人づくりが大切で、村の若者を育てたいということでした。しかし私は当初、仕事が忙しいので断りましたが、結局説得されて引き受けることになりました。

作家の高橋義夫さんに顧問になつてもらい、私も顧問をさせられました。

この塾には10代から40代まで60人程度集まりました。1年目は村全体を勉強し、2年目は村外の研究をして、3年目に2年間学んだことをもとにして実行しようというものでした。

71年には私自身、この塾とは別に「平田大六研究所」という塾をつくっていました。村の塾はいわば学校で

すが、この研究所は私の私塾です。この塾にはサブタイトルをつけました。「若い者に夢をしかける無料の私塾」といいます。塾といっても私は責任をもたない、だから出入り自由です。

塾というものは吉田松陰の松下村塾でもそうですが一つは本来はリーダーの強い個性がないと成り立ちません。二つ目には、入れば生涯の付き合いになる。というのが私の塾についての考え方です。

この塾は中学生から高校生まで10人ぐらい集めて始めましたが、最初は主にサバイバルなどを教えました。もし仮に東京で大地震がおきたら、君たちは必ず生きて関川村まで帰ってこい。その方法を訓練しようなどと話しました。

山へ行ったり各地を訪ねたりしました。村にはその頃、大石ダムの建設が進められていましたが、古いものを保存することも大事だということで木曾の妻籠宿を視察に行きました。子どもには金がないので往復とも夜行列車で行きました。向こうの駅に到着したのが午前2時で、そこから現場まで歩きました。子どもたちは古いものを保存する重要さがわかったようでした。

研究所といいますが私の仕事は、子どもたちが研究したいテーマについて、それをやるにはあの人に聞け、そのために紹介してやる。あるいはここに行つて調べろとか相談にのることが主な仕事でした。

84年の夏の頃、中学3年生の男の子が一人、研究所に入りたいと訪ねてきました。

目的は数十年前に廃鉱になった村の鉱山を調べたいということでした。私は鉱山の専門家でもないので断りましたが、しかし彼の熱意に負けて入所を認めました。

彼は高校3年間を費やして「関川村沼川鉱山跡調査報告第一報、第二報」としてまとめました。その後勉強のために上京しました。

またこんなこともありました。村を通る国道113号線を平面交差にするか立体交差にするか話題になっていたころ、塾の子どもたちと3年間かけて村内の交通量調査を行いました。夏休みに24時間道路脇にテープを張って調査したこともあります。

私は山歩きが好きで、いろんな山に登ってきました。新潟県の登山団体の役員もやりました。そんな縁もあつて岐阜大学長の今西錦司さんなどと、村の山に登つ

たことがあります。秋差岳あきさだけや光鬼山こうきさんなどの登山にご一緒しましたが、このときも何人かの子どもたちも参加しています。別な機会には梅棹忠夫さんや中尾佐助さんにもお会いしました。

子どもたちには一芸を持った優れた人に接触して刺激を受けてほしいと思いました。

この塾を卒業した若者が今も村の中で活躍しています。行政や団体組織などにもいますし、あちこちで夢づくりをしています。

私のねがい

この村のなかに、無農薬などで農を楽しんでいる若者が、移住しはじめました。

私が塾づくりをした動機は、人間はお金やモノだけでは豊かとはいえないことを若者に知ってもらいたいと思っただけです。

例えば一方にはお金とモノがたくさんある生活がある。そしてその逆の方向にはお金もモノも少ない生活があります。お金やモノがたくさんある生活が必ずしも豊かな生活であるとはいえません。

お金やモノがなくても心が豊かであれば幸せになれる

るということを若者たちに教えたい。

お金やモノさえあれば幸せだとする価値観を変えてゆく必要があると思います。

これは私が塾をつくった動機でもあります。しかしこれは容易なことではありません。お金やモノはないが、心の豊かになる生活を求めたいと思っています。

(文責・大滝浩道)

